

2007年3月10日

第8回山のトイレを考えるフォーラム講演

富士山および南アルプス南部における

施設整備とその費用負担

講師

伊藤太一

(いとう たいいち)

【出身地】 静岡県静岡市

【現職】 筑波大学大学院生命環境科学研究科

【略歴】 1978年京都大学農学部卒、同造園学研究室や北海道演習林勤務を経て、1994年より筑波大学で自然地域計画分野を担当。

【活動内容】 アメリカやケニア、ニュージーランドで多様な保護地域について学び、見て回った経験をふまえて、日本の保護地域のあり方を考えている。最近では富士山や南アルプスのような奥山だけでなく筑波山のような身近な空間の利用についても施設計画のあり方を調べている。

富士山および南アルプス南部における施設整備とその費用負担

伊藤太一(筑波大学大学院生命環境科学研究科)

1. はじめに

国内の山小屋を比較すると北海道・東北には無人避難小屋が多いが、それ以南では営業小屋主体の上、避難小屋でもシーズン中には管理人が駐在して有料となっている。これは登山史や登山者数などの反映とも言える。ここでは平安時代に遡る登山の歴史があり今年 20 万に達する登山者が訪れる富士山と、そこからよく見える距離でありながら最近まで登山者が限定されていた南アルプス南部を比較しながら、ニュージーランドも加えて、今後の施設管理のあり方について考えてみたい。

2. 富士登山の歴史

富士山は、既に文化遺産になった大峰や 701 年開山といわれる立山と同様、長い登山の歴史を有する。720 年頃に編纂された「常陸国風土記」における筑波山との比較で「福慈岳」として登場し、登山に関しては 870 年代に記された都良香の「富士山記」がある。山頂部の記述が正確であるため実際に登山した人物から聞き取ったと推測される。12 世紀には僧末代が富士山で修行した記録が残され、それを裏付ける 1220 年頃の経巻が山頂で見つかっている。また、室町後期に狩野元信(1476-1559)が描いた「富士曼荼羅」には多数の登山者が描かれ、戦国時代には富士登山が本格化した。ブームになったのは富士講が組織された江戸中期以降であり、ひと夏 2 万人以上が登ったと言われる。

このように歴史が長く登山者も多いので、登山道や山小屋など施設に加えて、強力などのサービスも高度に発達した。村山・富士宮口、須山口、須走口、吉田・船津口の 4 つが江戸時代における代表的な登山口であるが、後の 2 登山口は 8 合目で合流しているため、山頂部では 3 ルートとなる。これらの盛衰には政治、経済、噴火、交通アクセスという 4 つの要因が大きく関わっていた。

村山口は一番歴史が古く 12 世紀まで遡る。京都聖護院の傘下で修験者の勢力が山頂部まで及んでいた。しかし、1604 年に徳川家康が富士宮に浅間大社を寄進し 8 合目以上の支配権を与えた。これは 1779 年にも確認され、東海道からの登山者は富士宮を経由することが求められ村山修験の勢力は弱まった。さらに、1906 年に村山を経由しないで富士宮から直接山頂を目指すルート大宮新道が開削されると村山からの登山者は激減した。

1200 年頃には存在した須山口と須走口は 1707 年の宝永山噴火で壊滅的な打撃を受けたが、厚さ 4m もの火山灰で集落が覆われた須走口の方が早く復興した。これは登山に対する地域経済の依存度が須走の方が高かったからである。1780 年代になって須山口も復興したが、1883 年になってその 2 合 8 勺に御殿場口が接続した上、1912 年には山麓部のルートが演習場としての接収されたため廃道になった。

須走と同様、標高が高く農業などに高い生産性を見込めない富士吉田(海拔 850m 程度)では、登山に地域経済を依存する割合が一層高かった。特に富士講の御師は麓で御師宿を経営し、江戸からの登山者の食料や装備、ガイド、山小屋、山役銭など一切取り仕切っただけでなく、秋から冬にかけて江戸に出向いて講社員に対して浅間神社のお札や特産物を販売しながら夏の登山を勧誘していた。また、富士講の男女平等思想の影響もあり、対象を女性にも広げて、マーケティングとリピータ確保による観光経済を築き上げた。さらに、他の登山口とくらべても河口湖畔の船津にくらべても、江戸から一番短距離であり、遠方の名古屋や関西からの少ない登山者を相手にしていた静岡側の登山口よりも有利であった。

明治になると廃仏毀釈により、神仏混淆していた富士山の宗教は神道に統一され、その過程で富士講も衰退していった。一方で、鉄道や自動車が導入され登山への影響力が増大した。その影響を一番被ったのは、唯一鉄道駅から取り残された須山口である。当時の東海道線御殿場駅からの御殿場口が須山口 2 合 8 勺に繋がったからである。

鉄道敷設に続くもう一つの交通アクセス競争は、駅からの自動車利用である。江戸時代においても麓の集落から籠や駄馬によるサービスがあり、「馬返し」というサービス境界が設定されていた。大正期以降各登山口で、馬返しまであるいはそこを越えて、自動車が乗り入れるようになる。この頃ケーブルカーなどの敷設も議論されたが、1936 年の国立公園化に際して、動力アクセスを森林限界に相当する 5 合目に規制することになり今日に至る。だが、各ルート 5 合目以下の部分、すなわち一番生物多様性の高い空間を抜ける空間の利用が衰退した。一方で、精進湖から河口湖口 5 合目にいたる新たなルートが 1923 年に開設されてもいる。

3. 富士山の施設とサービス

富士登山の施設として麓の御師宿も含む宿や茶店、祠、それらを結ぶ道などがある。サービスとしては強力、飲食、防寒具賃貸、御師による旅行代理店的業務に加えて、搜索活動もある。遭難対応が営業権確認のため重視されるほどであった。これらは登山者のエッセイや登山口集落に残された史料から断片的に伺えるに過ぎない。それでも、江戸時代の富士山では多様なサービスが提供され、有料化が進んでいたことが明らかになる。池川春水などの「富士日記(1768)」や上吉田の御師が描いた「富士山明細図(1840 年頃)」がその例といえる。これらを有料化の視点から捉えてみよう。

まず、江戸から 4 日ほどかけて、時には沿線で「散銭」しながら富士吉田に到着した道者は御師宿に一泊した。そこで、水垢離のような儀式、強力、防寒衣類賃貸の代金に加えて、後には、予め山小屋の代金や「山役銭」という通行料を「登山切手」として払った。翌朝、北口本宮浅間神社に参拝すれば賽銭が必要だ。さらに、馬返しまで駄馬や籠に乗ればその代金も必要となる。1840 年に 2 合目に「女人改め所」が設けられたが、60 年ごとの庚申年には 1564 年頃と同様 4 合 5 勺まで女性の登山が可能となった。これは利用者増大に

貢献した。同じ2合目の「金剛杖役場」では14文徴収し、うち8文が粗悪な杖代となっていた。さらに、5合目「中宮役場」、頂上手前の「胸突前薬師」の小屋、頂上薬師岳の4箇所役銭が徴収された。これは不便なので後に御師宿で発行された「登山切手」改めとなった。この山役銭は各登山口で異なったが、後に共通化して各登山口に配分したり、駿河割引や関東割引など提供したりしたようだ。山頂部に到達して「お鉢廻り」をすると数ヶ所で「道造銭」や祠や銅像への賽銭が求められた。また、駒ヶ岳の急斜面にははしがが掛けられ、「梯子銭」も徴収された。もちろん、山頂の小屋で休憩すれば飲食代や筵代も必要になる。

登山者の払った役銭や宿泊料、「内院」と呼ばれる火口に投げ入れた賽銭の取り分も細かく決められていた。真夏で0°C近くになる山頂部まで「道造」がいたという事実は、下界で働くよりも収入が良かったと言うことを意味する。

今日でも、吉田口からの登山者が一番多く、5時間ほどの間に17軒の小屋が並び、合計宿泊人員は4,500名を超える。そこでトイレが問題になる。富士山の世界自然遺産化の動きの中でトイレ問題が浮き彫りにされ、1996年に富士山トイレ研究会が発足した。その後静岡側24か所、山梨側20か所程の最新トイレが整備された。管理人のいる山頂の2億円直轄事業トイレに代表されるハイテクトイレの展示場のような5合目以上に比して、歴史的遺産として修復された吉田口の5合目以下にはトイレもない。ROS(レクリエーション機会多様性)の視点からすると全く逆転しているのが富士山である。1996年以來の自然遺産化はあきらめて、2007年からは文化遺産化を目指して文化庁が暫定リストに載せることになったが、トイレ問題を解決しても山麓には不法投棄ゴミに加えて広大な演習場という課題がある。

トイレに関しては、村山口登山道における発掘調査から直径90cm程度の肥溜遺構がいくつか確認された。前述した池川は富士山に直接大小便をしないための「敷き紙」や大小便が許される「手水」を売っていたことを記している。すなわち、森林帯を越えた聖域「焼山」ではトイレがなく、敷き紙が舞っていただろう。明治時代のトイレに関する記述としては、1901年に河東碧梧桐・高浜虚子ら6人が御殿場口から登った際のエッセイに、頂上小屋の外にある厠の話が出ているくらいだ。この小屋にはコーヒー、角砂糖、ビール、正宗、卵などがあり外国人登山者が多かったことを物語る。同じ登山口を辿った小泉八雲はトイレにはふれていないが、登山者が脱ぎ捨てた草鞋で黄色い帯となっていて決して迷うことはないと記している。もう1人の外国人パーソンズも同様な記述を残している。クワウンナイ川源流部の問題と同様、すり切れた草鞋を廃棄物とすれば、今日のトイレトッパー以上に視覚的影響を及ぼしていたことになる。

4. 南アルプス南部の施設とサービス

南アルプス国立公園(1964年指定)南部、すなわち、赤石岳、聖岳、光岳などからなる地域は富士山とは対照的に登山の歴史が浅く登山者も少ない山である。このため、明治時代

から民間が山小屋経営に乗り出して競争していた北アルプス(中部山岳国立公園 1934 年指定)とは対照的に山小屋の整備は遅く、県(静岡、長野)が避難小屋を整備していった。1980 年から一部で食事提供が始まり、全部の営業小屋で提供するようになったのは 1997 年のことである。南アルプス南部への交通アクセスとして、大井川源流部に至る静岡側の他に、西の長野県側および北の山梨県側から縦走してくるルートもある。

南アルプスでは小屋とその土地、管理がそれぞれ異なるという特色がある。大井川源流部の土地所有が東海パルプの社有林であることがまず挙げられる。その社有林が南アルプス国立公園に指定され、自治体が計画的に山小屋を設置した。現在ではそれらに自社のロッジなどを加え 13 の宿泊施設を東海フォレストが一括管理している。厳密には、東海パルプ所有地に県や市が小屋を設置し、それらの管理を東海フォレストに委託している。

さらに、東海フォレストは路線バス終点から登山口に至る区間(畑薙第一ダムから樫島まで 17km)に送迎バスを導入している。このシステムは 1993 年の導入以来変化しているが、2004 年からは利用者は予め「宿泊施設利用券」3,000 円を払って乗車する。それらは 13 施設の宿泊料(2006 年度は素泊 4,000 円前後、2 食付き 7,500 円、ロッジは 8,000-13,000 円)に充当される。下山時にもシャトルを利用する場合には宿泊領収書を提示する。テント縦走する登山者がシャトルを利用したい場合には 3,000 円を払って 1 泊だけ山小屋を利用するか、その代金はシャトル代とするかであろう。歴史的経緯もあり東海フォレストが南部の小屋全部を管理しているわけではなく、1 元管理に対する批判もあるが、日本で唯一システムとして山岳レクリエーションを民間企業が管理しているところである。

百名山ブームの影響もあり登山者が増加しているが、民間企業であるゆえに安直にバイオトイレばかり設置するのではない。維持管理の手間や費用を慎重に検討して導入するトイレの方式を決めている。山麓部の営業小屋は水洗主体で、避難小屋はカートリッジ式主体である。このカートリッジの規格はヘリコプタによる輸送を考慮したものであり、中岳避難小屋で年 1 回、赤石岳避難小屋では年 2 回運ぶ程度だという。避難小屋では食事を提供しないのは水場がないということもあるが、本来の緊急時利用に限定したいという意図の反映かも知れない。その場合、割増料金を設定するという経済的な手法もある。

5. ニュージーランドの施設とサービスを考慮した考察

富士山と南アルプス南部の施設と管理を比較する以前に、利用者の違いを理解する必要がある。富士山は厳しい気象条件にもかかわらず「観光登山」者主体の山である。対照的に、百名山登山者が最後に訪れる山域であることからわかるように、南アルプス南部は技術的には楽だがベテラン主体である。このため、山小屋や登山道などの施設計画や管理も異なる。

富士山では小屋密度が極めて高く、特に江戸時代から 8 合目付近に集中している。夜中に発ち山頂で日の出を迎えるという宗教登山の影響が今日まで尾を引いているからである。4 登山口のうち、河口湖口の利用が今日に至るまで圧倒的に多いのは、歩き易さや安

全性、環境の点では他の登山口に一步譲るが東京からのアクセスという利便性が高いためである。同様に利便性本意で整備されたトイレでは、維持管理負担が検討されているとは言い難い。今後は登山者が減少するのは避けがたいので、利便性追求を見直し施設の規模や数を減少させつつサービスの質を考える必要があるだろう。

南アルプス南部の場合、富士山や北アルプスほどの利用がないゆえ行政が計画的に小屋を整備した。そのため、1日の歩行時間を考慮して小屋間隔や立地が検討され、稜線は避難小屋のみとしている。また、食事付きと自炊、テントの3種類のサービスをそれぞれの施設で提供していることも特色といえる。さらに、各登山口までの送迎バスも導入も注目される。日本では少ない計画的な施設整備とサービス提供がなされている事例といえる。それを一層明確にしたのはニュージーランドの保護地域における施設、特にミルフォード・トラックのシステムである。交通アクセスと宿泊を一体として多様な方法で予約し、フルサービスと自炊個人という2種類の施設を3kmほど離して設置している。また、歴史的には稜線縦走路でも登山道でもなく、東部の産物を西部に運搬する際に一番標高が低くて楽な峠越えルートである。一方通行によって出会いによる混雑感とトレイルの拡大を抑制している。課題として利用者の自由度減少が挙げられるが、ピークを避けるとかサービス水準の異なる類似トレイルを利用するというような方法がある。

6. おわりに

大雪山でも施設のあり方が自然地域の利用に影響力を及ぼしている。登山者は少しでも高い標高の登山口をめざし、そこからは小屋(水場)の配置を考慮してルートを決める。逆に、登山口や小屋の配置次第で利用管理が可能となる。ゆえに、施設計画に際して環境を考慮した利用水準やそれに見合う維持管理のあり方を慎重に検討する必要がある。たとえば、1)施設配置は安全や環境保全から稜線を避け森林帯にする、2)稜線の避難小屋利用を抑制するために料金を高くする、3)利用水準が低いときにはレンジャーが巡回して管理を兼ねて料金徴収する、4)曜日や季節によって料金を含む管理水準を変える、5)敢えて施設を設けず宿泊利用を抑制する、6)駐車や山小屋料金などの多様化、年間パスやチケット導入などという方法もある。トイレも高価で維持管理も大変なバイオよりもカートリッジ式で済ますとか、江戸時代の富士山の金剛杖役場のごとく携帯トイレを渡して管理費徴収という方法もあるだろう。

参考文献

青柳周一(2002) 富岳旅百景. 角川書店, 233 pp.

荒井信太郎(2006) 雲取山荘、夏期・冬季トイレについて. 地球環境とトイレシンポジウム資料集, 37-31.

伊藤太一(2005) 自然地域レクリエーション計画における有料化の展開. 森林計画学会誌, 39: 183-196.

- 伊藤太一(2006)ニュージーランドの保護地域における利用者管理施設. 第117回日本森林学会講演集, J04.
- 伊藤太一(2006a)江戸時代の富士登山から考える自然地域レクリエーションの有料化. 国立公園, 644: 4-7.
- 伊藤太一(2006b)計画論の視点からとらえる避難小屋管理のあり方, 山のデータブック, 山のECHO, 251-256.
- 伊藤太一(2006c)自然地域における空間利用とバイオマス利用. 第1回地球環境とトイレシンポジウム資料集, 69-72.
- 井野邊茂雄(1973)富士の歴史(富士の研究I). 名著出版, 504 pp.
- 岩科小一郎(1983)富士講の歴史. 名著出版, 564 pp.
- 清水孝之編・池川春水著(1968)富士日記・奥遊日記. 土佐群書集成第14巻. 高知市民図書館, 140 pp.
- 新人物往来社編(2002)図説富士山百科 別冊歴史読本, 27(19). 新人物往来社, 141 pp.
- 仁藤祐治(1984)富士山百一年. 悦声社, 220 pp.
- 森下一祥(2006)富士山トイレ整備と維持管理について. 地球環境とトイレシンポジウム資料集, 32-37.
- 河井和美(2007)南アルプス南部における山小屋配置が登山者のルート選択に及ぼす影響. 筑波大学大学院環境科学研究科平成18年度修士学位論文, 72 pp.
- 吉田歴史市歴史民俗博物館(1997)企画展図録富士山明細図. 富士吉田市歴史民俗博物館, 54 pp.
- 吉田歴史市歴史民俗博物館(2006)富士を登る. 吉田歴史市歴史民俗博物館, 107 pp.